

葛原市民センター館報「やすらぎ」
連載コラム

好きっちゃ葛原

総集編（～2023年度）



発行

北九州市立 葛原市民センター
2024年5月1日

2021年度

- 6月 森鷗外と足立山 葛原を訪れた？鷗外の話
- 7月 ホタル飛び交う山寺川 荒堀川という異名が伝える歴史
- 8月 葛原小学校のクスノキ 歴史を紡ぐ記念樹の話
- 9月 安政地震 そのとき小倉はある庄屋の日記から(前編)
- 10月 安政地震 そのとき小倉はある庄屋の日記から(後編)
- 11月 リハビリテーションの発祥地として足立山麓に芽生えた新たな歴史
- 12月 葛原に伝わる「としとこ様」不思議な形をした鏡餅の話
- 1月 葛原八幡神社の「ジガンさん」歴史を受け継ぐ人たち(前編)
- 2月 葛原八幡神社の「ジガンさん」歴史を受け継ぐ人たち(後編)
- 3月 今に再び蘇れ！山田耕祐の葛原小校歌

- 4月 今に蘇った妙見古道 荒れ果てた山道を復興した人達の話
- 5月 寺迫口はどこの寺への入口か地名に秘められた歴史を解く
- 6月 葛原遺跡 遺跡が語る古墳時代の営み
- 7月 茅の輪をくぐって悪疫退散葛原流「茅の輪」の作り方(前編)
- 8月 茅の輪をくぐって悪疫退散葛原流「茅の輪」の作り方(後編)
- 9月 葛原みどり山 どんぐり公園物語
- 10月 「敷地蔵」と「お獅子さん」
- 11月 新型コロナにもご利益あり？ 粉好きで子好きな「コツキ地蔵」
- 12月 大正時代に計画された一大娯楽施設「和気鉱泉倶楽部」とは
- 1月 歩いて知る地域の歴史見慣れた景色に歴史がいつぱい
- 2月 湯川で温泉は湧いたのか・・・「湯」に隠されたもう一つの意味
- 3月 地名に隠されたもう一つの歴史 「大柴山」という地名と柴神様

2023年度

- 4月 葛原の歴史が「本」になりました 地名から探る地域の歴史
- 5月 光らない鉄塔は日本一!?葛原の大地にそびえ立つ巨大鉄塔
- 6月 立派な石橋は今どこに!?小倉城に運ばれた「竹馬橋」の行方
- 7月 実はそれ・・・私が掘りました!ドキドキ楽しい遺跡発掘の舞台裏
- 8月 藪(やぶ)をつついて蛇を出すな 「藪巳社」に伝わる白蛇伝説
- 9月 葛原は市内随一の溜池密集地!?溜池をめぐる葛原の水事情
- 10月 欠号
- 11月 「新しい時代」の舞台裏に・・・長州戦争の惨劇と葛原の歴史
- 12月 「聞き書き」で知る古老の記憶 葛原と村の人たちの長州戦争
- 1月 小石多く甚(はなはだ)行がたかりし・・・葛原を歩いた菱屋平七の物語
- 2月 湯川のドンコは目が片目?「おみたらい」に伝わる郷土の俚謡
- 3月 葛原村嶽雲寺の古跡から遷された鍛冶町観音堂の愛染明王

2021年
6月

森鷗外と足立山

葛原を訪れた？鷗外の話

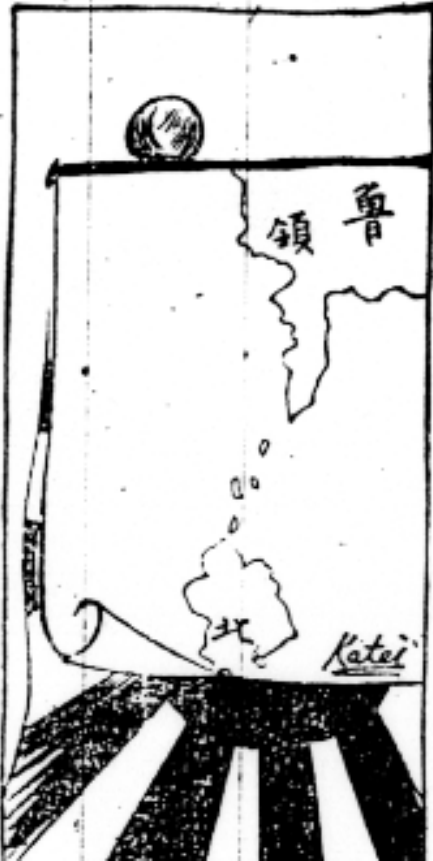
文／久保田 耕平

和氣清麻呂と足立山と

醫學博士

森 林太郎 稿

登前國に足立山ありろが麓に足立村あり世に傳ふ昔和氣清麻呂足の筋を斷ちて配流せられし時宇佐に詣でて神託を蒙りこの山の麓に湧き出でし温泉に浴してろの足故の如く愈々にさといふこの頃の事の據ありやあしやと考へてよと



諸人あり予僑居書に乏しくさる類の考をものせんこと甚難し頼に二階堂君の家に藏せる書

令和3年3月、明治の文豪森鷗外

の新たな自筆原稿が見つかったというニュースが全国を駆け巡りました。明治35年に鷗外が門司新報に発表した「和氣清麻呂と足立山と」の原稿です。

鷗外は自宅から見える足立山の由来に強く関心を寄せ、独自の考証を行いました。記事によれば、鷗外が葛原八幡神社を訪れて神社の縁起を調べていた様子も浮かびます。まもなく鷗外は東京に帰任しますが、その後も足立伝説を調べ続け、翌年には「続和氣清麻呂と足立山と」を発表しています。

明治の文豪をこれほどまでに魅了した足立伝説、その心を動かした源泉は一体何だったのでしょうか。

【足立山の由来】

奈良時代の昔、足を痛めた和氣清麻呂がこの山の麓にあった泉に浴したところ足が癒えて立てるようになったという伝説に由来します。

2021年
7月

ホタル飛び交う山寺川

荒堀川という異名が伝える歴史

文／久保田 耕平

葛原の中央を流れる山寺川では、ホタルを守る活動が行われており、初夏になるとたくさんのホタルを見る事が出来ます。

ところでその昔、山寺川は「荒堀川」とも呼ばれていました。いつもは穏やかなせせらぎも、ひとたび大雨が降れば暴れ川となるため恐れられていたそうです。上流には「辰ノ前」という池がありますが、ここ

には昔、水神様が祀られていたとか。日本には「辰」(龍)を「水の神」とする信仰がありました。宮崎駿のアニメ映画「千と千尋の神隠し」に登場する川の神様「ハク」がエンディングで白龍と化したシーンは、まさに日本人の精神観を表しているかのようです。

大雨の後には、ホタルの餌となるカワニナの多くが下流に流されてしまいます。ホタルを守る人たちは、流されたカワニナを1つ1つ拾い集め再び上流に戻します。こうした地道な努力を讃えるかのように、今年もたくさんホタルが幻想の世界へと誘ってくれました。



「小倉みなみ物語」(YouTube/北九州市制作)には、「山寺川をきれいにする会」の活動の様子が紹介されています。

2021年
8月

葛原小学校のクスノキ

歴史を紡ぐ記念樹の話

文／久保田 耕平

間もなく創立150周年を迎える葛原小学校。その校庭にそびえ立つ大きなクスノキは、長く学校のシンボルとして親しまれてきました。

本うえましたが、1本は倒しました。その1本が今はあのように大きくなったのです」（古老の談話、原文ママ）

1874年（明治7年）、葛原小学校は神社の裏にあった民家を借りて開校しました。その後1902年（明治35年）に、現在の地に移転します。もともと「荒神様」の祠（ほくら）があった場所で、地元では「荒神森」と呼ばれていたとか。PTAの機関紙「くすのみ」（葛原小学校母の会、1961）は、当時の様子を次のように伝えています。

長く子ども達を見守り続けてきたクスノキは、明治の子ども達が未来に託した記念樹だったのです。大きく枝を伸ばした樹冠の下には、今日も子ども達の元気な声が響き渡ります。

「荒神様は小さなやしきで、まわりに石がきがあり、たくさん杉の木にかこまれていました。（中略）
移転の時は御祝いをし楠の木を2



2021年
9月

安政地震 そのとき小倉は

ある庄屋の日記から(前編)

文／久保田 耕平



江戸時代の末、小倉地方を未曾有の大地震が襲います。今でいう南海トラフ巨大地震の一つ「安政南海地震」です。その日、この地方ではどのような事が起きたのでしょうか。小倉藩津田手永の大庄屋、中村平左衛門はそのときの様子を日記に書き残していました。いよいよ明日は、文字通りの「年貢の納め時」。蔵納めの準備に追われた平左衛門が、ようやく仕事を終えた夕刻……。

嘉永七年十一月五日 今夕七つ

過時 大地震(中略)当国にては古来未曾有の強き事その間ことに長く一分計りも動き人々誠に恐怖し多く戸外に出相凌ぐ(中村平左衛門日記八)

「古来未曾有の大地震」は一分ばかり続き、驚いた人々が家々から飛び出してきました。下曾根付近の揺れは特に強く感じられたとか。この時代、葛原から曾根に架かる唐戸橋の手前には、藩の米を保管する社倉がありました。万が一、この社倉が火事にあつては一大事。平左衛門は「火の元は念入りに候様」と付近の家々に触れて廻ります。

(次号につづく)

2021年
10月

安政地震 そのとき小倉は ある庄屋の日記から（後編）

文／久保田 耕平

安政地震の記録(嘉永七年十一月)

五日 今夕七ツ過時分大地震

夜分二も至リ軽重五、六度 も震き候

六日 夜分地震の気少々有之

七日 今朝より度々地震

朝四ツ時分尤甚し、一昨日よりも強く、乍去、刻合ハ短く候

夜分も軽重五、六度も震ひ候事

八日 夜分地震兩度輕し

九日 夜分地少震

小倉藩津田手永 大庄屋
「中村平左衛門日記」より

大地震の翌日になると、被害の様子
子が少しづつ明らかになつてきま
す。小倉城下では家屋の倒壊や屋
根の崩落が相次ぎ、畳を屋外に持
ち出して過す者も。時節は今の曆
で冬十二月。「寒くとも命にはかえ
られぬ」と余震に怯えながらも、懸
命に生きようとした先人たちの姿
が目に見えます。しかし、自然と
いうものに人情は露ほども無く、二
日後の朝……。

今朝より度々地震、朝四ツ時分尤
甚し、一昨日よりも強く、乍去(さ
りながら)、刻合は短く候

再び大地震がこの地を襲います。
後に豊予海峡地震と名付けられた
この地震は、最初の地震よりも強く
感じられたとか。

度重なる地震を前に、人々は祈る
しかありませんでした。湯川村の盲
僧らは千巻心経の祈禱を始め、津
田八幡社では国家安全の祈願が行
われました。人々は共に集まり祈る
ことで、先行きの見えぬ不安や恐怖
を和らげようとしたのかもしれない
せん。

江戸時代の末、小倉地方を次々と
襲った二つの地震は、現在の研究で
は震度五以上であったと推定され
ています。

2021年
11月

リハビリテーションの発祥地として 足立山麓に芽生えた新たな歴史

文／久保田 耕平

戦後間もない昭和24年、葛原高松にあった牧場の跡地に全国初の労災病院が開設されました。

「牧場跡の一面の原野に牛小屋が散在している九州労災病院に、文字通り草を分けて赴任した……」当時赴任した医師は語ります。

はじめバラックだった病棟は、間もなく日本最大といわれる立派なものに建て代わり、リハビリテーションに関する先進的な研究が始まりました。いつしか「リハビリテーションの陽は西から昇る」と称されるようになると、労災病院は名実ともにリハビリテーションの聖地＝発祥地となったのです。

ところで、この労災病院が設置された足立山麓は古くから平癒回復

を願う祈禱所、療養地としての歴史がありました。奈良時代には和氣清麻呂がこの地の霊泉で足を癒し、山頂では眼病平癒を祈願して奉納した平安時代の古鏡も見つかっています。葛原八幡社の近くには平癒寺という古寺の名残りや、湧水を利用した湯治場の跡もあります。足立山麓はいわば古代から受け継がれたリハビリテーションの聖地でもあったのです。

全国初の労災病院と、それに続くリハビリテーションの歴史が、こうした歴史的所縁ある土地で芽生えたことは単なる偶然でしょうか。因縁深き二つの歴史を結びつけた真実の裏側は、未だ謎のベールに包まれています。

2021年
12月

葛原に伝わる「としと二様」

不思議な形をした鏡餅の話

文／久保田 耕平



正月飾りの定番、鏡餅。大小二つの餅を重ね、ミカンを乗せた姿は誰もが知るところ。しかし、この地方に伝わる古い形の鏡餅は、少し変わった形をしていたようです。

「としと二様」と呼ばれるその鏡餅は、座となる鏡餅の上に二段重ねの小餅を十二個並べ、さらにその上に鏡餅を重ねます。小みかんを挟んだり、小餅が一段となる地域もあるそう。「としと二様」というのは、元旦になると幸せを運んで来ると伝えられる歳徳神(としとくじんの)のごとで、鏡餅は本来この神様へのお供物でした。

十二個の小餅は「十二月様」と呼ばれ、閏の年は十三個になります。現在の暦では四年に一度、二月を

二十九日として一年は十二ヶ月で変わりませんが、旧暦では数年に一度、十三カ月の年がありました。このことから、小餅の数が月の数を表していると考えられています。同じ形をした鏡餅は小倉南区の三谷地方でも見られ、今でも一部の旧家で飾られているそうです。

地元では特別珍しいものではなかったためか、これまで取り立てて紹介される機会も少なかった郷土の鏡餅。当たり前の日常の中に、大切な「地域の宝」が眠っているのかもしれません。

2022年
1月

葛原八幡神社の「ジガンさん」

歴史を受け継ぐ人たち（前編）

文／久保田 耕平

清原郷字佐八幡宮より
勸請申し奉るる神社
にして古来より地元
すゝ家統十三軒ありて
毎年九月二十八日二十九日
の大祭よりハ神饌 俗湯取
飯トキヲを神前に供し祭儀

清らかで森厳な空気に包まれた葛原八幡神社の長い参道。歩き進むと狛犬ならぬ「狛猪」が出迎えてくれるのも面白味の一つ。奈良時代が終わって間もなく、葛原の里人がこの地に和氣清麻呂をお祀りして、神社が創られたのは今から二二〇〇年も前のことです。それから現在に至るまで、この神社を守り、受け継いで来たのは一体誰だったのでしょうか。福江宮司にお話をうかがいました。

かつて葛原には「地元（ジガン）さん」と呼ばれる十三の家がありました。ジガンとは、いわゆる神主とは異なる地域に根付いた祭祀者のこと。葛原の神社は長らく神主が常駐していませんでしたので、日常

のお世話はジガンの人たちが交代で行っていたようです。それが何十年、何百年、まさか千年も続くとは……。

令和の時代になり、ジガンの人たちは今どうなったのでしょうか。

十二月の某日、一本の電話が鳴りました。「今度の土曜日、面白いものを見せてやるけ。神社に来てみるか」。さうそく神社を訪ねてみると……（次号に続く）

2022年
2月

葛原八幡神社の「ジガンさん」 歴史を受け継ぐ人たち（後編）

文／久保田 耕平

十二月の某日、神社を訪ねてみると、数名の男たちが何やら準備をしていました。神社の総代と呼ばれる人たちです。聞けば、今から拝殿に飾る注連縄を作るのだとか。新藁の青い香りが漂う作業場の仲間に入り話を聞きます。

「何が大変か。まずは、この藁を集めるところ。農家の人に一年前からお願いして。機械で刈ったら使いもんならんけ、俺らが刈りに行く。他所とこが、どうなつとるか気になって、見に行つたこともあった。良う出来とると思うて見たら、ナイロンやった。あれは長持ちするけ、ええもんよ。でもな、こつやつて俺ら皆んなで作るもんが良からうが。そうそう、来週は門松を作らんといいけん。二対。神社と市民センターに飾るやつ。これも俺らが作るんぞ」

手間暇を惜しまず、自分たちの手で伝統を受け継ぐ姿に、かつて神社を守り継いできた「ジガンさん」の精神を垣間見た気がします。彼らはいつも裏方で地域の伝統を支えてきました。単なる宗教的な信仰心では説明できない「地域への誇り」や、「使命感さえも感じられてなりません」。



2022年
3月

今に再び蘇れ！

山田耕笹の葛原小学校歌

文／久保田 耕平

探しています！教えてください！
この「小学校の歌」を知っている方！

■ 教えて欲しいこと

- ・校歌のこと(歌詞やメロディ)
- ・当時の学校や思い出
- ・戦争の記憶
- ・災害の記憶
- ・子ども達に伝えたいこと
(どれか1つでも構いません)

草萌ゆる荒神の丘
桜花の雲閉せる中に
眠ること寂かにたてり
美しのわが学び舎は

お心あたり
のある方



葛原市民センターまで

093-475-2185

かつて葛原小学校には「赤とんぼ」や「待ちぼうけ」の作曲者として有名な、山田耕笹の手による「小学校の歌(校歌)」がありました。作曲を依頼したのは、北九州市内で数多くの校歌を手掛けた松本治彦氏。赴任先の東京で山田耕笹と知り合い、「母校である葛原小の子ども達に、歌を作ってほしい」と頼んだところ、快く引き受けてくれたのだとか。

昭和十九年から二十六年頃に歌われていたこの校歌は、とても叙情的でブルースのようなメロディだったと聞きます。しかし昭和二十七年に現在の校歌が完成すると、山田耕笹の校歌は次第に歌われなくなりました。今や楽譜の行方すら分からなくなり、その貴重なメロディは「当時の子供たち」の記憶にしか残っていません。

歴史のひだに埋もれ行く山田耕笹の校歌を復活させたい。私たちは「この歌を知っている」という方を探しています。お心当たりのある方ぜひ、葛原市民センターまでお知らせください。

2022年
4月

今に蘇った妙見古道

荒れ果てた山道を復興した人達の話

文／久保田 耕平



足立山の頂にある妙見上宮、通称「妙見さん」は、古くから葛原の人々に親しまれていました。戦前までは毎年九月十三日になると、村人総出で参拝し、お籠りをしていたとか。しかし戦争が始まると、軍の司令で山に登ることは禁止されました。

人が歩かない山道は、やがて廃れてしまいます。土砂の流出で道は埋もれ、そこに草木が繁ると藪となつてもはや道としての原型をとどめない状態になってしまいました。

「もう一回、妙見さんに登ってみていい……」

平成十一年、ある古老の一言に心動かされた人たちが、荒れ果てた道の復興を決意して立ち上がりました。一方で、この道は市の風致地区に指定されており、作業には市の

認可が必要でした。こうした複雑な事情の中、山道の復興作業は十年以上にわたり、その作業の回数は百回を超えたとか。そして、ついに……。

拓かれた道は「妙見古道」と名付けられ、春になると「お花見登山」と題して、子ども達も一緒に「妙見さん」に登るイベントが催されました。その参加者の数は、なんと七〇名を超えたとか。

あれから二十年。復興に勤しんだ人たちの高齢化や、風致地区という特殊な事情もあって、道の維持が再び課題になっています。地域の遺産、古道の復興にかけた人たちの思いを風化させぬよう、今何ができるのか。考えるべき岐路に立たされているのかもしれない。

2022年
5月

寺迫口はどこの寺への入口か 地名に秘められた歴史を解く

文／久保田 耕平

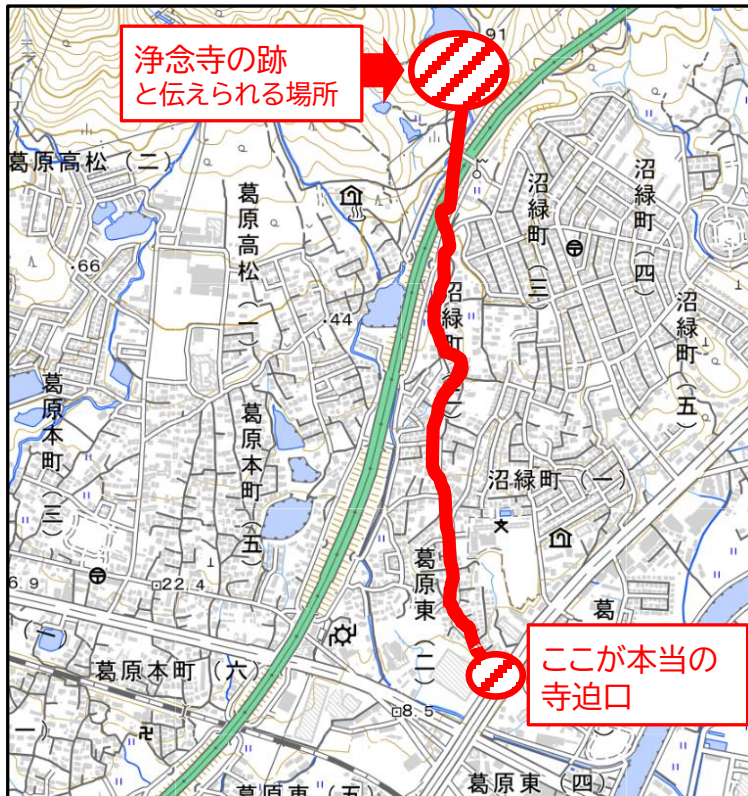
「次は寺迫口、寺迫口…」、西鉄バスの車内放送に流れるバス停の名前に、あるとき、ふとした疑問が湧きました。寺迫口というのは、どこへの寺への入口なのだろうか…。

葛原には称名院という寺がありません。豊前国の国人領主、長野氏と縁ある寺です。伝え聞く話では、昔、戦に敗れた武者が身を隠す場所でもあったとか。たしかに南側の石垣は要塞のような作りで、実際、幕末の長州戦争ではここに砲台が築かれました。しかし、寺迫口との関係はなさそうです。他にも寺があったのだろうか…。

ある時、地域の行事で居合わせた方から、興味深い話を聞きました。その寺の名前は「浄念寺」。天台宗

のお寺で、室町時代の戦で焼失したのだとか。早速、地図を開いて、寺跡と伝えられる場所を示していただく…。そこは、寺迫口から遠く離れた山の中。昔、寺迫と呼ばれていた場所だそう。なるほど、寺迫口とは寺迫にあった「浄念寺」への入口だったのか。また、「迫」というのは、小さな谷という意味があるらしく、寺迫の由来にも納得できます。

私たちが口頃、何気なく使っている地名。その由来のひとつひとつを調べていくと、土地の歴史や伝説はもちろん、当時の風景や、生活の様子までが、浮かび上がって来ます。



葛原遺跡

遺跡が語る古墳時代の営み

文／久保田 耕平

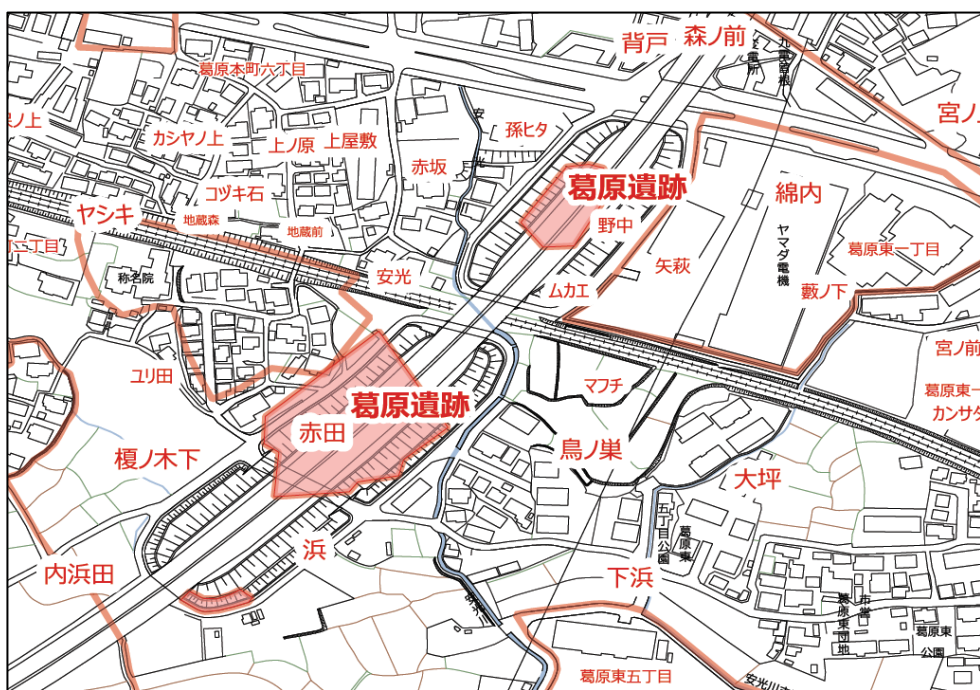
葛原遺跡は葛原本町六丁目から葛原元町二丁目にかけて広がる遺跡で、昭和五十四年、九州縦貫自動車道の建設工事の際に発掘調査が行われました。見つかったのは主に古墳時代の住居跡。竪穴式住居が三十四基、高床式倉庫が三棟見つかった他、多量の土器や古墳時代特有の埴輪も出土しています。

この時代、葛原の人々はどのような生活をしていたのでしょうか。報告書を手掛かりに、ある竪穴式住居の様子を見てみます。

南向きの入口から中に入ると、そこは八畳ほどの空間。その奥にカマドがありました。住居の中からは紡錘車が見つかっており、ここで糸を紡いでいたことが分かります。周辺では多数のタコ壺も出土しました。

すぐ近くまで海が迫っていた様子もうかがえます。もしかすると、食卓には新鮮な魚貝が並んでいたのかも……。

遺跡が見つかった場所は山海の幸に恵まれた、とても住みやすい場所と思いきや、集落としての存続期間は短かったようです。彼らはなぜ、この場所を手放し、どこへ行ったのでしょうか。謎多き古代へのロマンが掻き立てられます。



「葛原遺跡」は高速道路の真下に位置します。周辺には「浜」や「綿」(古語で海の意)、「フチ」といった海に関連する古い地名が残っています。
(「北九州市埋蔵文化財分布地図」および「曾根町土地宝典」を元に著者作成)

2022年
7月

茅の輪をくぐって悪疫退散

葛原流「茅の輪」の作り方(前編)

文／久保田 耕平



茅の輪(ちのわ)をくぐることで災厄を祓い、無病息災と悪疫退散を願う「茅の輪くぐり」は、伝統的な夏の風物詩。この主役となる茅の輪は、地域の人たちの手によって、毎年作られています。

青々とした茅の輪の主な材料は茅(カヤ)。もつとも、茅という学名の植物はなく、ススキやチガヤといった、イネ科の植物の総称なのだとか。茅の輪作りは、この材料となる茅を採るところから始まります。

民家の屋根が茅葺だった時代、茅は重要な建築資材でした。葛原にも茅場(かやば)と呼ばれる茅を育てて、採るための場所がありました。しかし、茅葺き屋根がなくなった今日、まずもって、この茅の入手が難しい。

葛原の茅の輪にはススキが用いられます。その量、何と軽トラ二台分。ススキが自生する所を見つけては、採らせてもらうよう地主の人をお願いしているのだそう。

採ったばかりの青々しい茅も、真夏の日差しの下では数日も経たず褐色に変わってしまいます。そのため、茅を採るのは「茅の輪くぐり」が行われる夏越祭の前々日。すぐに水を浸したバケツに入れ木陰に保管します。そして前日、いよいよ茅の輪作りがスタートします(次号に続く)。(文)

2022年
8月

茅の輪をくぐって悪疫退散

葛原流「茅の輪」の作り方(後編)

文／久保田 耕平



夏越祭の前日、神社の参道には作業台となるビールケースが三、四つ置かれていました。運ばれて来たのは、直径約二メートルの鉄の輪っか。茅の輪は、この芯となる輪っかに茅(カヤ)の束を巻き付けて作ります。

巻き始めは茅の輪の下部。ここから右回りと左回りの二手に分かれて巻いていきます。最初はビール紐で仮止めし、全体の形が整ったら、今度は葛のカズラで仕上げていきます。この仕上げには「男結び」が用いられます。「俵結び」とも言うらしく、その昔、米俵を作るときに用いられた結び方だとか。しかし、これが難しい。そのため、仕上げにあたるのは経験豊富な熟練者。ちなみに、葛のカズラを用いるのは葛原ならではの「こだわり」だ。仕上げを

終えた茅の輪は五、六人がかりで持ち上げて、支柱に取り付けます。茅の輪には表裏があり、結び目のない方が表。この表側が社殿を向くよう設置します。

さて、この茅の輪について。そもそも茅の輪の形に決まりはないそう。地域や時代、作り手によって形が異なります。葛原の茅の輪も、数十年前までは、もつと小型で簡素だったとか。それが今や立派なものに。伝統とは、過去の形を守ることではなく、そこに関わる人たちの手によって、常に変化し続けるものなのかもしれない。

2022年
10月

「敷地祓い」と「お獅子さん」

文／久保田 耕平



毎年九月になると、葛原の家々には小さなお神輿に乗った神様がやって来ます。「敷地祓い」と呼ばれるこの風習は、今では小倉と門司の一部地域でのみ行われている伝統行事です。大人二人で担ぐ小さなお神輿を神台(さかきだい)と言い、その後を神主さんと、総代さんが太鼓を打ちながら町内を巡ります。家に着くと神台を座敷に上げて祝詞を奏上。用意しておいた塩水と、南天の葉で敷地をお清めします。もともと、「こ」最近は新型コロナウイルスの影響もあって、神様も遠慮がち。玄関先でお祓いをする「門(かど)祓い」が主流です。

毎年九月になると、葛原の家々訪すごく簡単に言つと「神様の家庭訪問」。神台には葛原八幡神社の御祭神と、祓戸大神(はらえごのおおかみ)というお清めをする神様が乗って来られます。いつもは神社にられる神様が、直々に家に来られるというのは実は凄いいことで、何百年も続いています。葛原の場合、秋に大祭がありますが、その前に村中を清めておくという意味があったのかもかもしれません。江戸時代は本当に獅子頭を持って回っていました。だから地元の方は、今でも「お獅子さん」と呼んでいます。「獅子受け」とも言います。神社には江戸時代に作られた朱塗りの獅子頭が、今も大切に保管されていました。とても江戸時代の物とは思えないほど美しく、くまなく重たい獅子頭。長い歴史と伝統の重みを感じずにはいられません。

2022年
11月

新型「コロナ」にも「利益あり?」

粉好きで子好きな「コツキ地蔵」

文／久保田 耕平



称名院の山門左手脇殿に、「コツキ地蔵」と呼ばれるお地蔵様があります。もともとは葛原本町六丁目、日豊本線に架かる日の出橋の辺りにあったそうですが、大正六年に今の場所に移されました。詳しい経緯こそ分からなくなりましたが、昔の字図を広げてみると、たしかに「コツキ石や地蔵森、地蔵前」といった地名が見られます。地元の人にとっては、生活の中に溶け込んだ大切なお地蔵様だったのでしよう。

古老の話によると、「コツキとは」地域の方言で、「咳き込む」という意味なのだとか。子どもが咳病を患ったとき、「この地蔵にきな粉を御供えすると良くなる」とか、背中を撫でると良くなる」とか言い伝えられてきました。

少し風変わりな信仰ですが、よくよく調べてみると、門司区伊川や苅田町南原にも似たような謂れを持つ「コツキ地蔵」がありました。そして、北九州から遠く離れた徳島県にも。「こちらは地蔵様ではなく、屋敷神として祀られる「コツキの神様」ですが、やはり子どもの咳に「利益があつて、麦粉やハツタイ粉をお供えするのだそう。」

神仏に穀物の粉をお供えすると子供の咳が治るといふ信仰は、どうやら葛原だけでなく、広く知られた信仰だったのかもしれない。

2022年
12月

大正時代に計画された一大娯楽施設

「和氣鉱泉倶楽部」とは一体……

文／久保田 耕平

和氣鉱泉倶楽部創立趣意書

我國が因循姑息の保守的時代より急速の革新を為さず古界文明國の班に伍せざるは社会萬般の事業は日に月に復雜を極め生存競争ハ益甚敷成り神身の疲はらハ日一日と重くなるに於て其慰安を要求するの勢も亦甚大あるハ當然の款であるソレテ都合の紳士紳商ハ驕奢ある別荘を閑靜の地又ハ温泉所在地の勝地等に設け其疲勞を茲に置するを常とて居ますナルと此の如きは独り富裕なる貴顕紳士にのみ求むべくして一般人士の企て及ばざる知て有るす茲に

つい最近のこと、葛原のある御宅で、大正時代に書かれた一綴りの書類が見つかりました。「和氣鉱泉倶楽部創立趣意書」と題されたこの史料は一体何なのでしょうか。

「足立山の称起りたる神秘的歴史

を有して奏功顕著なる湯川の靈泉を以て(中略)此處に一大鉱泉場を設置(中略)四季の花木珍草を植へ奇岩怪石を桃置し小舟を泛ぶべき大泉水を掘削して鯉鮒等の河魚を飼養し、更に此園内に旅館、料亭の外、図書館喫茶店、玉突場、大弓場、射的場等萬般の娯楽場を建設し夜間は常に電燈裝飾をなし社交的に療養、娯樂を具備したる一大倶楽部を(中略)設立して現下の社会的要求に応せんことを」

なんと大正時代のはじめ、この足立山の麓に、大規模な娯楽施設を

建設する計画があったといつので、計画は実現しませんでした。世界の大国と肩を並べんと、西洋文化を取り入れつつも、日本らしさとの融合を求めた、当時の人々の気概さえも感じられます。

そして何よりも、和氣清麻呂伝説からリハビリテーション発祥地としての歴史に至るまで、この足立山麓に「心身の回復を求める場所」としての信仰があったことを裏付ける、貴重な「お宝」でもありました。もしかすると、あなたの御宅にも人知れず眠る「お宝」が隠されているかも？

2023年
1月

歩いて知る地域の歴史

見慣れた景色に歴史がいつばい

文／久保田 耕平



市民センターを出発して東に数分、左手に見渡しの良い高台が見えてきます。幕末の長州戦争では、ここに砲台が築かれました。「妙見様」と呼ばれる道祖神もあります。昔、曾根方面から足立山の妙見上宮に詣でる人は、ここから山道に入ったのだとか。南に進路を変え、旧国道を渡った一帯が葛原遺跡です。古墳時代の集落跡で、タ「壺」が出土するなど、かつてこの近くに海があったことを伝えていきます。線路を超えてさらに南下すると、侵食作用で出来た段丘と呼ばれる地形が見えてきます。これが昔の海岸線の痕跡とされています。ここから西に歩くと、福寿庵という御堂、貴船社・東照寺の旧跡があります。「城籠(じょうごもり)」と呼ばれる場所は、中世土豪屋敷の跡で、かつては「こを

中心に集落が営まれていました。さらに進むと、明治時代に作られたトンガ造りのトンネルがあります。鉄道が開通した当時のまま、レトロな姿を見せてくれます。葛原交番がある辺りは「イックシマ」と呼ばれ、昔はここまで海が差し込んでいたのだとか。いよいよ終点の葛原八幡神社。北九州最古の木造社殿の中に、珍しい「逆さ獅子」の装飾があります。さあ、どこにあるのでしょうか。

健康づくりと街散策をテーマにしたウォーキング講座。見慣れた景色の中に、地域の歴史を見つけてみませんか？

2023年
2月

湯川で温泉は湧いたのか…

「湯」に隠されたもう一つの意味

文／久保田 耕平



昔々、湯川には温泉があつて、和氣清麻呂がこれに浸かったら足が治つて立てるようになった。地元ではあまりにも有名な足立伝説ですが、一方で「本当に湯川で温泉が湧いたのか」という素朴な疑問もまた、人々の興味を引きつけてきました。火山がないから温泉はないだろう。湧水を沸かしたのではないか。寒い日に池から立ち上る湯気の様子を言ったのではないか。泉の中でドンコ(小魚)を踏んだというから湯ではなからう。様々な可能性が意見される中、民俗学の視点から考えると、また違った解釈も生まれるかもしれません。

民俗学者の折口信夫は、日本における「湯(ゆ)」の起源は古代に遡り、本来は禊(みそぎ)するために浴する水、「齋川水(ゆかわみず)」の

略語であつたとしています。本来は自然に湧く冷水のことで、温湯を湯と称するようになったのは遙か後代のことだとか。そして、湯(齋)に浸ることは、古代の日本人にとつては、復活や再生の意味があつたと結んでいます。

湯川には御告川という川がありません。童子の姿をした宇佐の神がここに現れ、川上を指差して「湯(齋)」の場所をお告げしたと伝えられます。二〇一六年、この御告川の川上で古代の祭祀場、「安部山祭祀遺跡」の一部が発掘されました。葛原八幡神社の旧跡地でもあるこの場所で、人々は何を祈つたのでしょうか。足立伝説を生んだ思想と信仰の源泉が、ここにあつたのかもしれない。

2023年
3月

地名に隠されたもう一つの歴史

「大柴山」という地名と柴神様

文／久保田 耕平

上葛原地区の一面に、地元では

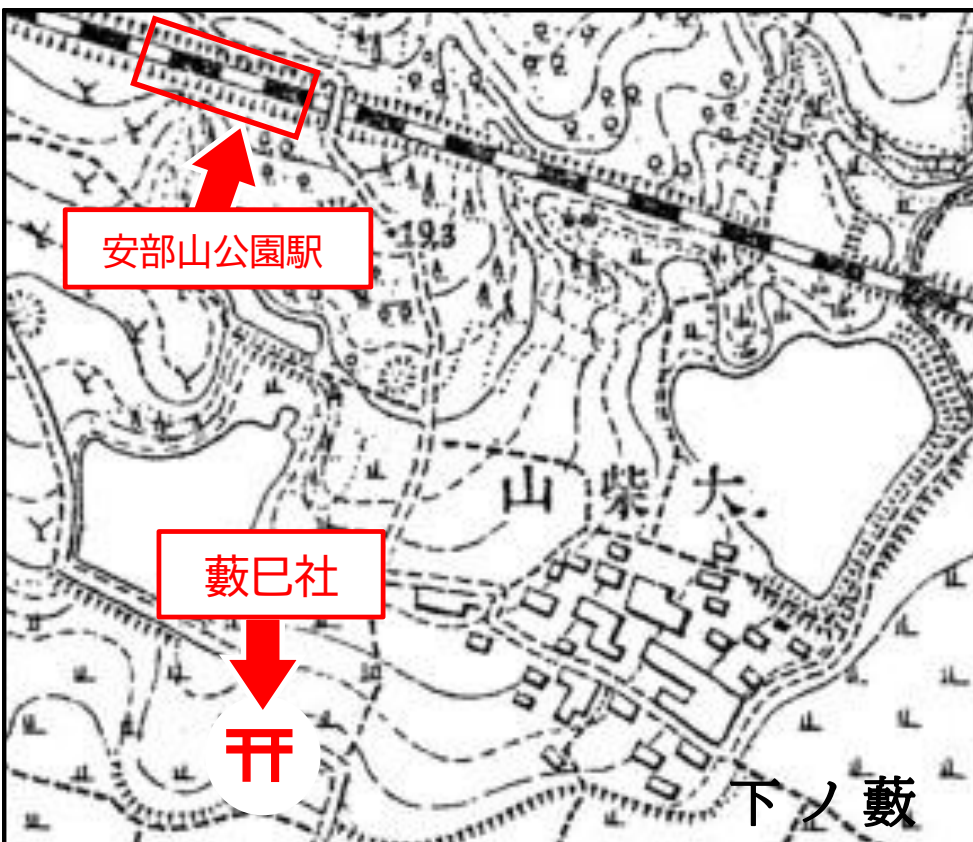
「大柴山」と呼ばれる地名(小字)があります。その昔、和気清麻呂が宇佐八幡神の御告げに導かれて、この地を訪れたとき、この場所で柴を折って体を休めたのだとか。これに因んで、もともとは「折り柴山」と呼ばれていたものが、いつしか「大柴山」と訛ったと伝えられています。もっとも、この周辺に山はありません。付近には「藪ノ下」という字名や、「藪巳社(やぶへびしゃ)」という社があることに鑑みると、あるいは雑木林の広がる丘陵地を「山」と呼んだのかもしれない。

「いんべい」の柴を折るという行為にはどのような意味があるのでしょうか。民俗学者の折口信夫は、峠や山の口にあって通行の安全を

守る道祖神のことを柴神、柴折様

などと呼び、通りすがりの人が柴や青草を手向ける習慣があったとしています。もともとは、道なき山道などで、木の枝を折って帰路の道しるべとした日常的な習慣が、いつしか行路の安全を守る柴神や柴折様という信仰を生み、引いては道祖神として結びついたのかもしれない。

「大柴山」という地名は清麻呂伝説の一部としてだけでなく、柴折という古来の習俗がこの北九州にもあったことを裏付ける、貴重なエビデンスなのかもしれません。



2023年
4月

葛原の歴史が「本」になりました 地名から探る地域の歴史

文／久保田 耕平



令和五年二月、葛原の歴史を著した本、「葛原と史(ふびと)の記(しるし)」が発行されました。市民センターの呼びかけで集まった有志、「葛原の歴史を綴る会」の皆さんと一緒に、学び合いながら作り上げた作品です。

タイトルにある「史(ふびと)」には、「歴史を伝える人」という意味があります。地域の歴史は、地域の人が、地域の人に伝えるもの。いわば、葛原に住まうお一人お一人が、「歴史を伝える人」「史」であるという思いが込められています。

第一号となる今回の作品は、「地名から歴史を探る」ことをテーマにしたものです。かつて葛原には四一四もの小字がありました。その一つ一つに意味があります。例えば、「荒堀」という地名は、河川の氾濫で

えぐり取られた場所、地形を意味しています。竹馬川沿岸には「浜」と付く地名が多くあります。「かつて葛原には海があった・・・」。そんな言い伝えを裏付けているかのようです。

地名を知ることが、単に過去の歴史を知ることではありません。地名の中には、過去に起こった自然災害を記憶するものもあります。これらを知ることは、未来に向けた防災への取り組みにもつながるのではないのでしょうか。もちろん、地名だけで危険な場所と決めつけて、むやみに住む人の恐怖心を煽るべきではないでしょう。様々な可能性や解釈を検討した上で、想定外の災害にも対応できる防災力を身につけること。これが祖先たちが、今を生きる私たちに託した、本当のメッセージなのかもしれません。

2023年
5月

光らない鉄塔は日本一!? 葛原の大地にそびえ立つ巨大鉄塔

文／久保田 耕平

足立山の山腹から、小学校と神社の間を抜けて、長野方面に繋がる送電線。点々と連なる紅白の鉄塔も、すっかり日常の景色に溶け込んでしまい、これが一体何なのか…。普段、気に留める機会もないかもしれません。

そういえば、「鉄塔の音が大きくなると、天気が悪くなる」という観天望気(天気にもつわる噂)を耳にしたことがあります。大気中の水分や潮風が関係しているのなら、あながち間違いでもないかもしれません。

この鉄塔に架せられているのは「関門連系線」という北九州変電所(小倉南区田代)と、新山口変電所(山口県美祢市)とを結ぶ超超高電圧送電線。言わば九州と本州をつなぐ電気の大動脈で、そこには五千万ボルトという、日本の送電線の中では最高電圧の電気が流れています。鉄塔の近くで聞こえる「ジー」という音は「コロナ放電」と呼ばれる現象で、あまりにも電圧が高いため、ガイシに付着した塩分や水分が影響して、音が生じるのだそう。

ところで、平地部では背の低い「門型鉄塔」が立ち並んでいます。元々この場所は旧北九州空港の滑走路延長上にあつて、飛行の障害となる背の高い鉄塔を設置出来なかった事情がありました。夜になつても赤色障害灯が点灯しないのも、進入灯と誤認されないための規制によるものとか。北九州空港が移転した今、もし鉄塔の建て替えがあれば、今とは全く異なる景色になるかもしれません。



2023年
6月

立派な石橋は今どこに?!?

小倉城に運ばれた「竹馬橋」の行方

文／久保田 耕平

葛原を東西に流れる竹馬川(ちくまがわ)は、小倉南区長野の山々や足立山を水源に周防灘に注ぐ、延長約六キロの河川です。昭和四十五年頃から、河川の拡幅と護岸整備、防潮水門の整備などが行われてきました。明治時代の地形図を見ると、元々の川幅は現在よりもずっと細く、蛇行していた様子がうかがえます。

竹馬川という名前は、この土地の成り立ちと歴史に由来します。その昔、この竹馬川の流域は周防灘から湾入した入江で、旅舟を泊める港がありました。この地に縁深い、和氣清麻呂や菅原道真もこの港に舟を泊めたと伝えられます。つまり、現在の川岸は昔の「船着き場」で、これが後に転じて、「ちくま」になったとか。

ところで、竹馬川には幾つもの橋が架けられています。歴史的に有名

なのは葛原・湯川から、横代・長野方面に続く往還に架けられていた「竹馬橋(着場橋)」でしょう。とても立派な石橋だったらしく、江戸時代の初め、初代小倉藩主の細川忠興は、築城中の小倉城にこの橋を運ばせ、北の丸の堀に架けたと伝えられます。

その後、細川氏は小倉から熊本に移るようになりますが、忠興はお気に入りだったこの石橋を、わざわざ隠居先の熊本の八代城にまで運ばせたという、美しやかな逸話まであります。その橋は、今も八代市の名勝「松浜軒」の庭園にあるとかないとか…。
〈文〉久保田 耕平

2023年
7月

実はそれ・・・私が掘りました！ ドキドキ楽しい遺跡発掘の舞台裏

文／久保田 耕平



昨年六月、本連載で「葛原遺跡」の記事を掲載したところ、「それ、私が掘ったんですよ」という、嬉しいお便りをいただきました。早速、市民センターを介して面会し、お話をうかがいました。昭和五十四年、葛原遺跡の発掘に携わったのは葛原元町に住む林春恵さん。当時の記念写真を手に、柔らかな口調で語ってくれました。

まず、ユンボを使って遺跡のある地層近くまで掘り下げました。その深さはなんと2〜3メートルもあったとか。古代の遺跡は、こんなにも埋もれていたのです。「学芸の先生は、ここを何メートル掘ったら遺跡が出るって、知ってるんですよ。これには皆が関心していました」。

ユンボのあとは、いよいよ林さんたちの出番。ネジリ鎌を使って、地表の土を掻き出します。土の色の変化を

見ながら掘り進めると、土器の破片や穴がたくさん見つかったそうです。

遺跡の南端部は、水っぽく、砂礫のように柔らかい地層でした。そこで林さんが掘り当てたのが・・・、古墳時代の「たこ壺」だったのです。手の平サイズの小さな「たこ壺」は、学芸員の先生たちも驚くところで、その後しばらく、博物館で展示されていたのだとか。

発掘調査は、真夏の炎天下で行われました。「背中が真っ黒に日焼けしたけど、あの時は楽しかった」と語る林さん。調査員仲間で、バス旅行にも行ったのだとか。写真に映る皆さんの笑顔を見ると、遺跡で見つけた本当の宝物は、苦労と喜びを分かち合った、仲間たちとの絆だったのかもかもしれません。

2023年
9月

藪(やぶ)をつついて蛇を出すな

「藪巳社」に伝わる白蛇伝説

文／久保田 耕平



上葛原から湯川新町に続く道の傍に、「藪巳社(やぶみしゃ)」と呼ばれる小さな祠が、ひっそりと祀られています。地元では「やぶがみ様」とも呼ばれているこの社には、どのような謂れがあるのでしょうか。「藪巳社」を知るといふ方から、「人づてに聞いた話」として教えていただきました。

むかしむかし、この社の裏にある白い岩(石灰岩)の傍に、白蛇が住んでいました。あるとき、この白蛇にイタズラをしたところ、災いごとが続くようになりました。村の人たちは「白蛇の祟りに違いない」と考え、白蛇(＝巳)を鎮めるために社を建ててお祀りしました。これが「藪巳社」の由来になるのだとか。

かゝるやぶ、神社の縁起によくある「祟り話」の一つかと思いきや、この

話には、続きがありました。白蛇の社が建てられてから、しばらくして――。「祟りなど迷信だ」と言う人が、興味本位で御神体とする白い岩にイタズラをしてみました。すると、心乱して舌を噛み切ってしまったのだとか。くわばら、くわばら。

白蛇は水の神様として知られています。昔は、貴船神社の神職がお祀りをしていたという話もあり、「藪巳社」もまた大切な水の神様としての性格があったのかも知れません。

「大切な神様だからこそ、触らぬように」という教えは、ときには「祟り」として信仰されてきたのでしょうか。藪をつついて蛇を出さないように…。

2023年
10月

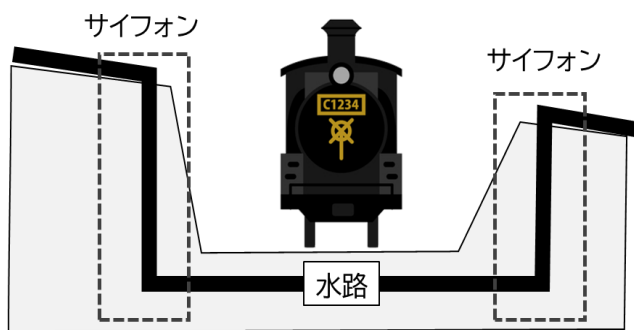
葛原は市内随一の溜池密集地!?

溜池をめぐる葛原の水事情

文／久保田 耕平

葛原にある多くの溜池は、江戸時代に人の手によって造られたものです。明治時代の地図を見ると、現在の倍近く、四十一もの溜池がありました。もっとも、地図に載らない程度の小さな溜池が他にも多数あったとか。なぜ、これほどまで、多くの溜池が造られたのでしょうか。

江戸時代の末、小倉藩は度重なる早魃(かんばつ)に悩まされました。雨乞い祈願のために、葛原新町樂が奉納されたこともあります。しかし、神頼みだけでは命を繋ぐことは出来ません。村の人にとって、何よりも安定した水源確保が最大の課題だったのです。葛原の場合、南端の竹馬川が最も大きな河川ですが、海拔0メートルに近いこの川から水を組み上げることは困難でした。そこで、足立山の山裾に「こぞつて溜池を造る」と言いました。文政七年(一八一四)に



葛原高松に新池を築く際には、人夫として二八〇〇人を見積った旨が、当時の庄屋日記に記されています。さて、時代は下って明治時代、ある事件が起こります。鉄道線路の建設です。このままでは、溜池から水を引く大切な水路が、線路で遮られてしまいます。そこで、考え出されたのがサイフォンの原理を用いた灌漑設備でした。百年たった今でも、現役で使用されています。

今では「危険」「汚い」と厄介者扱いされる溜池も、昔の葛原の人にとっては命を繋ぐ大切な水瓶でした。時代とともに、人の価値観は変化します。しかし、その根底にあった生きるための知恵や工夫、努力の軌跡は、忘れてはならない地域の財産ではないでしょうか。

2023年
11月

「新しい時代」の舞台裏に…

長州戦争の惨劇と葛原の歴史

文／久保田 耕平



江戸時代の末期、慶応二年のこと。「尊王倒幕」の旗印を掲げる長州藩と、これに対抗する幕府方の小倉藩との間で、大きな戦争が起こりました。

門司から上陸した長州勢は、赤坂で激しい攻防戦を繰り広げた後、ついに小倉城下に侵入します。小倉勢は自らの居城に火を掛け、香春方面に撤退し、事実上の敗戦となりました。しかし、その後も戦は決着せず、ゲリラ戦となって地方の村々に壊滅的な被害をもたらしました。ここ葛原も激しい戦場となり、結局、長州勢に制圧されます。湯川の旧道には「地雷火」が仕掛けられ、葛原には「ダイバ」と呼ばれる砲台が到る所に築かれました。八月八日には、葛原元町の称名院に大砲を築き、曾根から朽網方面に侵攻するための「炊き出し本部」として陣が敷かれました。葛原の家々は長州勢の宿として占拠されます。

一方、小倉勢も村々から農兵を募り、奪還作戦を繰り広げました。八月十二日、

吉田村と沼村の農兵たちは、長州勢の兵糧を横奪する作戦に出ますが、敢えなく失敗。捕虜となり処刑されてしまいます。この悲劇を弔(とむ)らう慰霊碑が「寺ヶ迫の十八人塚」として残っています。

そして十月十三日のこと。葛原の民家に一通の書簡が投げ込まれました。「(小倉勢からの)止戦の申し出」でした。その後、上曾根の浄土寺で会談が行われ、長州からは山縣狂介なる人が出席しました。止戦の条件は、幕府から長州再征討の命があっても、小倉藩は出兵しないという内容で、小倉藩はこれに合意、ようやく戦は決着しました。

さて、この会談に臨んだ山縣狂介なる人…、実は、後に内閣総理大臣となる若き日の山縣有朋でした。大政奉還、そして明治という新しい時代を迎える舞台裏に、葛原の歴史があったことは、ほとんど知られていません。

「聞き書き」で知る古老の記憶

葛原と村の人たちの長州戦争

文／久保田 耕平

幕末に起こった長州戦争。この戦争を子供の頃に体験したという古老の話が、「聞き書き」として残されています。江戸時代に生まれた古老の「口調」や「訛り」にも注目です。

「やっぱり、ごわついていた。この辺には農兵というのが沢山出て、ゲールちゅう鉄砲を持たされた。『これなら雨が降っても打てるぞ』と皆が話していたのを覚えている(中略)長州がまだ来もせぬうちに、城下の人は逃げ出した。雨が降って、歩いたこともない士の女連が田舎道を歩いたのは、ほんと惨めな有様で、それこそ着の身着のままじゃった」

「こっちは狸山、向う(長州)は、葛原台に陣取り、その間の曾根台の大きな樹は、この時、皆刈られた。樹があつては見通しがつかんというのじゃった。(中略)そして、下曾根と中曾根が皆

焼かれて……。それで皆長州を憎んだ。喜八(農兵)は長州の首を三つもさげて帰って威張ちよつた」

「長州は、葛原の称名院と○○(個人宅)との間に砲をすえ、後に唐戸の付近に台場を築いて、長いこと狸山と打合つた。『どたん』というと、ばあと土煙があがる。弾丸ちう奴は奇妙な奴で、恐れるものによつた。台場の盛土に、弾丸がはまつちよるのを拾いに行くこともあつた」

「(終戦後)毛利預けとなつて、小倉時代より年貢が少なくなつた。だが長州の来始めは無茶だつた。食われるものは何でも持つていく。鶏ときちや片っ端から奪られてしまう。私は長州に刀をつきつけられて、何か出せとおどかさされたことがあつたけど、斬りきらんことは知つちよつたけ平気やつた。曾根が焼かれるとき、村の人は、貫の方

に逃げたが、すぐにたいてい戻つて来た」(松本治彦著「葛原校区読本」より)

古老の語りは、庶民の目から戦を捉えた貴重な証言です。時代に翻弄されながらも、力強く生きて延びた村の人たちの苦勞、不安、そして勇氣すらも感じられます。



長州戦争時の葛原村絵地図(慶応2年)。葛原村の宿陣、砲台、地雷、民家の配置が精巧に描かれています。

2024年
1月

小石多く甚(はなはだ)行がたかりし… 葛原を歩いた菱屋平七の物語

文／久保田 耕平



葛原を東西に横切る「中津街道」。かつては、小倉城下の常盤橋から中津までを結ぶ主要幹線道路として、重要な役割を果たしていました。もともと「中津街道」という呼び名は、近年一般的になった通称で、元々は「中津往来」、あるいは中津側からすると「小倉往来」と、行き先の名前を冠して呼ばれていたようです。この道が主要街道の一つとして整備されたのは、江戸時代初期現在はアスファルトで綺麗に舗装された生活道ですが、往時はどのような姿だったのでしょうか…。少しばかり文献を覗いてみましょう。

江戸時代の享和二年(一八〇二)。尾張の商人、菱屋平七は九州を遊歴し、その記録を「筑紫紀行」に残しました。平七は湯川から葛原を抜けて、曾根方面に向かいますが、その途中の道の様子について、次のように書き記しました。

「是迄平道の大道なれど、小石多く甚(はなはだ)行がたかりしに、是より繩手にかかりて浜手に出る道いとよし」(曾根までは平坦な大道であったが、小石がたくさん転がっていて歩きにくい。ここから先、あぜ道を抜けて浜に抜ける道はよく整備されている)。

平七が中津街道を歩いた時、折しも曾根では新田開発のための埋立工事が行われていました。工事に必要な物資や人を運ぶため、道も綺麗に整備されていたのでしょうか。一方の葛原は足立山の裾尾に位置しており、一度雨が降れば山からの土砂が麓まで流れてきた…。と伝えられています。これが道を悪くした原因なのかもしれません。

私たちが普段、何気なく通る道。そこにある歴史の歩みを辿ってみても、面白いかもしれませんね。

2024年
2月

湯川のドンコは目が片目？

「おみたらいい」に伝わる郷土の俚謡

文／久保田 耕平

「湯川のドンコは目が片目」というのは、湯川水神社の霊泉、通称「おみたらいい」に伝わる俚謡です。昔、和気清麻呂がこれに浴したとき、誤って水底に棲むドンコ（ハゼの仲間）を踏んでしまいました。以来、湯川のドンコは目が片目になってしまったとか。

さて、このドンコの話は少々有名らしく、北九州の文豪、火野葦平は湯川のドンコをモチーフにした短編小説「片目の鈍魚（どんこ）」を書きました。少々風呂敷を広げた話になっていますが、湯川のドンコの黒焼きが、ゴノゴッケンという病の特効薬になるとして、主人公の男が怪しげな店に買い求めに行く艶笑譚です。ドンコの黒焼きに薬効があったか否かはさておいて、かつて小倉の市中では実際に「湯川のドンコ」が見せ物として販売されていたとか。しかも、片目を線香で焼き潰した状態で……。

ところで、湯川のドンコのような「片目の魚」にまつわる逸話は、日本全国に残って

れています。片目になった理由は様々ですが、大体が神社近くの池にあつて、神聖視されていました。さて、これが何故なのか……。民俗学者の柳田國男は、この伝承に関心を持ち、論考「片目の魚」を著しました。

柳田によれば、古来、神様にお供える魚は、川や湖水から捕っていましたがお祭りの日まで、一時的に神社近くの池に仮置くことがありました。このとき、他と区別するために、便宜上、お供えする魚の目の片方を潰していたのではないかと……。

「湯川」は、古代の言葉で「斎川（ゆかわ）」＝禊（みそぎ）する神聖な川とも読めます。そこを流れる川は、今も「御告（おつげ）川」と呼ばれています。「神聖な「斎川（ゆかわ）」で捕られたドンコを水神様の神殿にお供えしていたとすれば……。仮置いたであろう霊泉の存在も含めて、案外、柳田の説は考えられるのかも？

2024年
3月

葛原村嶽雲寺の古跡から遷(うつ)された 鍛冶町観音堂の愛染明王

文／久保田 耕平



小倉北区の繁華街、鍛冶町の一角に鍛冶町観音堂と呼ばれる御堂があります。御本尊として千手観音菩薩、不動明王、愛染明王、地藏菩薩、延命地藏菩薩などがお祀りされており、周囲にはどこからか持ち込まれたと思われるお地藏様も、たくさんお祀りされています。さて、この鍛冶町観音堂にある愛染明王像について、興味深い記録が残されています。

安永九年庚子十二月八日を以て、企救郡葛原村嶽雲寺の古跡を城東鍛冶町の地に遷す。新たに一堂を造り、嶽雲寺の古仏愛染尊を安める。古寺の号を伝へて、愛染堂と為す也。

愛染堂は後に鍛冶町の観音堂に合祀されたようですが、何より興味深いのは葛原村嶽雲寺の存在です。

調べを進めると、小倉北区の足立山妙見宮、かつては和氣清麻呂伝説に

由来する寺院として栄え、一時は末社として六坊を連ねていた中に「岳(嶽)雲寺」の名前がありました。他には「温泉寺」という寺も。よもやと思いい、湯川の方に尋ねてみると、「たしかに、昔、湯川水神社の近くに温泉寺なる寺があったと聞いたことがある」とか……。「嶽雲寺」のことは、分からぬ「このことでしたが、和氣清麻呂伝説の舞台地である湯川や葛原に、妙見宮の末社が営まれた可能性は十分に考えられるのではないだろうか。「嶽雲寺」については、これ以上のことは分かりません。ただ一つ、葛原の片田舎から鍛冶町に迎えられた愛染明王が、夜も賑やかな繁華街を今も見守り続けていることだけは確かなようです。